

対人的距離化スキルと社会的認知傾向の連関 —静止顔刺激に対する印象評定からの探索的検討—

石井佑可子 高橋翠¹ 遠藤利彦²

問題と目的

社会的スキル研究は複数の起源を持っており、臨床心理学、社会心理学、教育・発達心理学などの分野ではほぼ同時期に誕生した。社会心理学領域はその中心的研究の一つであるが、この領域での研究は、Argyle (Argyle, 1967; Argyle & Kendon, 1967) の「社会的相互作用中に生起する一連の個人的行動は便宜的には一種の運動スキルと見なせる」という示唆から始まった。彼は運動スキルモデルに倣って、社会的スキルのモデルを提案した (Argyle, 1967)。このモデルで Argyle は、相手に対する知覚と、その情報をもとにどのような形で関われば良いのかを決める「翻訳」を経て対人行動が実行され、またその結果がフィードバックされてその後の相互作用に影響するという循環的処理過程を想定している。その後、社会的スキルの定義を巡って種々の検討が行われ、様々な定義が提案されたが、統一見解は得られないまま、これに関する議論は衰微してしまった。最近では特に定義の統一を目指す動きは見られず、研究者がその目的に応じて各自簡潔に設定するにとどまっているようである (定義の一覧としては相川, 2009参照)。ただし、近年は社会的スキルを単なる個別のパフォーマンスだけではなく状況認知を組み込んだ処理過程全体とする立場 (相川・佐藤・佐藤・高山, 1993; 相川, 2009など) や、階層性を持つと捉える立場 (大坊, 2008など) が主流となっており、Argyleが初めに提案したのと同様に、対人場面の知覚・認知から対人行動、結果の解釈まで

1 東京大学大学院, 日本学術振興会

2 東京大学大学院

の流れを含めて社会的スキルとする向きが多い。

このように定義が曖昧なままにも拘わらず、社会的スキル概念は主に実践介入の場で多くのコミュニケーション教育に利用されている（総説として Hargie, 2006 など）。相川（2009）は社会的スキル概念の安易な使用や、その内実を吟味していない傾向を批判し、社会的スキルを総体として単純にみるのではなく、その具体的な構成要素を取り上げた方が良くと述べている。さらに、社会的スキル概念を使用した実践介入には、その効果に関する弱点も指摘されている（Trower, 1995 ; DeRosier & Marcus, 2005 ; 渡辺・星, 2009 など）。

これらの問題点から、石井（2006）は今一度社会的スキル研究を批判的に考察し、従来研究の社会的スキル測定項目でスキルとして取り上げられているのが親和や主張などといった所謂「望ましい」コミュニケーションのみである点や、測定や実践介入時においてスキル行使時の状況要因について考慮が不足している点を指摘した。そして社会的スキル概念検討や実践介入の際の弱点は現実味が欠如し、生態学的妥当性が低くなっていることに起因すると主張し、現実場面に効果を持つ社会的スキル行使を検討するため、スキルレパートリーの多様性や状況の認知及びそれらに基づいたスキルの巧みな調節を重視した処理過程の提案を行った。そこで特に強調されたのは、社会的スキル行使時のメタ認知の重要性と、回避や欺瞞などといった、従来望ましくないとされてきたネガティブコミュニケーションを社会的スキルとして扱える可能性に関してであった。この提案を踏まえて石井（2007）は、自らの心情を素直に吐露し関係を維持させていく従来型の社会的スキルだけではなく、回避や欺瞞を含む、内面の気持ちを正直に表明しない、関係を収束させるコミュニケーション行動もスキルと考えた。そして前者を対人的接近スキル、後者を対人的距離化スキルとし、これらの二側面から成る尺度を作成した。また先行研究において、適切なスキルは状況によって変化する（Argyle, 1967 ; Hargie, 1986 など）と示されているものの、前述したようにスキル測定の際に状況要因が考慮される

ことは無かったため、この対人的接近－距離化スキル尺度では、スキル行使時の状況要因の検討として、各項目のスキル行動に親密性が異なる相手を設定し、それぞれの相手に対する行使程度を問う形式をとり、相手に応じたスキル行使の調節傾向を測定するよう試みている。そして、コミュニケーション状況や相手との関係性の把握、自らのスキルレパートリーについての知識などを問うメタ認知尺度も併せて作成し、多面的なスキルと、その行使時におけるメタ認知の測定を組み合わせることを目指してきた。

これらの尺度を使用した調査では、青年期中期段階の軽度非行少年と一般高校生を比較すると、非行群は対照群と比較して接近スキルが有意に高く、距離化スキルやメタ認知は有意に低い結果となり、距離化スキルやメタ認知の重要性が示唆されている（石井・新堂，2011）。この結果は、少年非行の大きな要因が逸脱行動を行う他者への同調とされていることから、対人的距離化スキルの行使が非行への巻き込まれを抑制する役割を担っていると解釈されている。また、青年期後期にあたる大学生を対象とした際には、メタ認知が自尊感情やポジティブ情動の高さと関連すること、また対人的距離化スキルは単独では殆どが自尊感情やポジティブ情動の低さやネガティブ情動の高さと関連するが、「半知り」の相手に対して行使する場合に限っては、行使主体の誇り感情の高さを維持しうることやメタ認知との交互作用効果がみられ、対人関係に関するメタ認知を高く働かせた上で、すなわちその場の状況を十分に理解した上で敢えて実行する距離化スキル行使の高さは、社会的適応の各指標の高さと有意に関連することも明らかになっている（石井，2011）。ただしこの傾向は、対象が青年期中期段階である高校生だった際には認められなかった。石井（2014）では、高校生群では一貫して対人的接近スキルを使った場合のみ適応指標が高くなり、対人的距離化スキルを行使することはどのような条件においてもネガティブな主観的情感に繋がることが示された。石井・新堂（2011）で、対人的距離化スキルが少年らの非行参入リスクを予防していると示唆されたことを併せて考えると、青年期の比較的早い段階での対人的距離化スキ

ル行使は、非行への誘引など対人的リスクを防ぎはするものの、本人の自覚的な適応感にはネガティブに影響するといった齟齬が生じていると考えられる。つまり、このスキルは青年期の進行に従って徐々にその行使頻度や機能が変化していくと推測できる。

以上のように、対人的距離化スキル行使は適応に与える影響が部分的に示唆され、また青年期のさなかに徐々に獲得し機能するようになっていくという発達の変遷が詳らかになりつつあるといえるが、一方で、対人関係状況において距離化スキル実行を支える、よりミクロな要因についてはあまり明らかになっていない。また、従来型の社会的スキル行使と社会的情報処理傾向との関連についても直接検討している研究がほとんどないようである。先述の通り、種々の社会的スキルの概念モデルではスキルを処理過程とみなしており、対人状況における情報の取り込みや認知に関わる段階を設置しているものが多いにもかかわらず、そうした想定の実証は少なく、スキル実行に際していかなる社会的情報処理がなされるのかの実態については不明なままといえよう。

こうした理論と実証との乖離を鑑みると、対人的距離化スキルのみならず、社会的スキル全般において、その行使がいかなる社会的情報処理に支えられて実施されているかを検討する必要があると考えられる。そこで本研究では、対人的接近スキル及び対人的距離化スキルの双方を対象として、これらのスキル行使に至る要因の一つとして社会的情報に対する個人内の情報処理傾向に焦点を当てることとしたい。具体的には、同一人物の異なる表情を示した静止顔刺激画像を複数提示し、対象人物に対する印象評定と社会的スキルとの関連について、青年期を対象とした調査から探索的に検討する。接近スキルは親和や主張を主としていることから、複数の刺激写真の中からそれらの行動を動機づけるようなポジティブな情報に着目する程度が高いほど、接近スキル行使も高くなると予測できる。一方、これまでに示唆されている距離化スキルのリスク回避的機能を鑑みるならば、他者表情が発する自己にとって危険なシグナルへの敏感性は距離化スキル

行使傾向との関連が強くなると考えられる。

方法

対象者 高校生群：関東圏公立高校の男子生徒26名（1～3年生，平均16.53歳），女子生徒137名（1～3年生，平均16.94歳），計163名。大学生群：関東圏の大学生男性78名（18-24歳，平均20.17歳），女性103名（18-23歳，平均19.88歳），計181名。

質問紙の構成 対人的接近 - 距離化スキル尺度：石井（2007）作成の表出 - 非表出スキル尺度を，石井・新堂（2011）によって実際の項目内容に沿うよう，名称変更したもの。ポジティブなスタイルのスキル（対人的接近スキル）だけではなく，相手との距離を取るスキル（対人的距離化スキル）も含めた尺度。接近スキルについては6項目，距離化スキルについては8項目。この尺度はスキル行使を相手との親密性ごとに測定する形式で，各項目に対して，「親しい人（家族や友人）が相手だった場合」「友人を除く活動の仲間が相手だった場合」「親しく無い人が相手だった場合」の3通りに回答を求めた（図1の例参照）。4件法。

1	意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる	普段どの程度行いますか。
	親しい人が相手の場合・・・・・・・・・・	全く—あまり—たいてい—いつも
	中くらいに親しい人が相手の場合・・・・・・・・	全く—あまり—たいてい—いつも
	親しくない人が相手の場合・・・・・・・・・・	全く—あまり—たいてい—いつも

図1 対人的接近 - 距離化スキル尺度回答形式例

表情刺激：ATR 表情画像データベース（DB99）から，男女各1名の顔写真（同一人物の無表情，怒り，幸福，恐怖の4表情）を使用した（図2に男性顔の例）。



図2 使用した表情刺激（男性の例）

写真の人物に対していかなる印象を抱くかについて7件法で評定させた。印象評定項目は、対象人物自身の属性を評定させるものと、対象人物が評定者自身に対してどのような態度を有しているか評定させるものの二面から成っており、対象者自身の属性評定については、「あなたは顔写真の人物に対してどのような印象を抱きますか？」との教示文で、「信用できる（以下、信用）」「頭がよさそう（明晰）」「ずるい（狡猾）」「優しい（優しさ）」かどうかの4項目、評定者自身に対する態度評定については「写真の人物は あなたを見ながら、何を考えていると思いますか？」との教示文で、「あなたをだまそうとしている（騙し）」「あなたと友達になりたいがっている（友好）」「あなたを馬鹿にしている（見下し）」かどうかの3項目を設定した。

結果

スキルと印象評定の全般的関連を把握するため、各スキル得点（親密性条件別）と各印象評定得点の相関分析を高大・男女群ごとに行った。分析を各群別に行ったのは、前述のとおり、これまでの研究（石井, 2013）で、青年期中群と後群に該当する高校生と大学生では、距離化スキル行使頻度やその機能に差があると示唆されたためである。

単相関分析結果 まず、各印象評定とスキル行使得点との単純相関を検討した。以下、群別に結果を記載する。

高校生男子：男性顔に対する明晰性認知と低条件での接近スキル行使との間に正の相関（ $r = .61, p < .01$ ）が、見下し認知と低条件での接近スキル行使との負の相関（ $r = -.49, p < .05$ ）が有意に認められた。

表1 高校生男子における各スキルと印象評定との相関

	距離高条件		距離中条件		距離低条件		接近高条件		接近中条件		接近低条件	
信用	.39	.41	.28	.16	.20	.17	.15	.04	.06	.36	.32	.10
明晰	-.11	.11	.07	.45*	-.28	.18	.33	.43*	.29	.00	.61**	.04
狡猾	.25	-.12	.04	.36	-.20	.09	-.24	.32	-.27	-.33	-.16	.05
優しさ	.13	.17	.29	-.09	.41	.33	.41	.06	.33	.53*	.33	-.05
騙し	.27	.20	-.05	.24	-.15	-.09	-.39	.02	-.10	-.20	-.23	.19
友好	.12	.37	-.21	.15	-.24	.14	-.19	.13	.26	.40	.08	.02
見下し	.01	.18	-.06	-.17	.25	.13	-.11	-.19	-.02	.14	-.49*	-.25

※ 左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数/女性顔への評定値との相関係数」を表す。

※ *は5%、**は1%水準で有意であったことを示す。

また、女性顔に対する明晰性認知と中条件での距離化スキル行使（ $r = .45, p < .05$ ）、高条件での接近スキル行使（ $r = .43, p < .05$ ）との間に正の相関が有意に見られ、さらに優しさ認知と中条件での接近スキル行使との正の相関（ $r = .53, p < .05$ ）が有意であった（表1）。

高校生男子の男性顔に対する印象評定は親しくない人に対して行う接近スキルと関連することが明らかになり、対象の男性を明晰であると感じる人ほど主張や親和などのスキルを行使し、見下していると感じる人ほどそ

のスキルを使わない傾向にあることが示された。女性顔に対する印象評定とスキル行使との関連は対象の女性を明晰であると感じる人ほど親密性が比較的低い相手に対して距離をとるスキルを行使する一方で、親密性の高い相手に対しては接近するスキルを行使する傾向にあることが示唆された。また優しさ認知との関連も見られ、対象の女性を優しいと感じる人ほど接近するスキルを行使する傾向にあることが明らかになった。

高校生女子：男性顔に対する信用 ($r = .18$)、優しさ ($r = .18$)、友好意図 ($r = .20$) 認知と中条件での接近スキル行使との間に有意な正の相関が認められた (いずれも $p < .05$)。女性顔に対する評定では、信用認知と高条件 ($r = .19$)、低条件 ($r = .19$) 双方での接近スキル行使との間に有意な正の相関がみられた (いずれも $p < .05$)。また、狡猾認知と中条件 ($r = .22, p < .05$)、低条件 ($r = .27, p < .01$) での距離化スキル行使との間に正の相関が有意に認められ、騙し意図認知と低条件での接近スキル行使との間には負の相関 ($r = -.19, p < .05$) が有意に見られた。友好意図認知は中条件の距離化スキル行使とは負の相関 ($r = -.20, p < .05$) が有意であったが、高条件 ($r = .20, p < .05$)、低条件 ($r = .29, p < .01$) での接近スキル行使とは有意な正の相関が認められた (表 2)。

高校生女子の男性顔に対する印象評定傾向は比較的親しくない人に対する接近スキルと関連することが示され、対象の男性を信用でき、優しく、友好意図があると感じ取る人ほど中程度の親密性の相手に対して主張や親和のスキルを行使することが示唆された。女性顔に対する印象評定傾向は、接近スキル、距離化スキル双方と関連することが明らかとなった。まず距離化スキルに関しては、対象の女性を狡猾だと感じる人ほど比較的親しくない人に対して回避や欺瞞のスキルを行使し、友好意図を読み取る人ほどそのスキルの行使をしないことが示された。接近スキルに関しては、対象の女性に対して信用できる、友好意図があると感じる人ほど主張や親和のスキルを多く行使し、騙し意図があると感じる人ほどそのスキルを行使しないことが示された。この傾向は親しくない人に対するスキル行使条件で

は三つの評定すべてで、また親しい人を相手とした行使条件では信用と友好意図評定の二つで認められた。

表2 高校生女子における各スキルと印象評定との相関

	距離高条件		距離中条件		距離低条件		接近高条件		接近中条件		接近低条件	
信用	-.09	-.12	.01	-.10	.02	-.16	.11	.19*	.18*	.12	-.03	.19*
明晰	.08	-.08	-.03	-.08	-.02	-.10	-.14	.12	-.11	.14	.02	.04
狡猾	.05	.17	-.10	.22*	-.13	.27**	.05	.03	.01	-.07	.03	-.16
優しさ	-.11	.00	-.13	-.01	-.12	-.09	.16	.08	.18*	.09	.09	.16
騙し	.02	-.01	-.04	.07	-.06	.15	.01	.04	-.10	.00	.07	-.19*
友好	-.01	-.08	-.17	-.20*	-.14	-.17	.08	.20*	.20*	.21*	.13	.29**
見下し	.03	.02	.03	.05	.00	.06	-.10	-.05	-.15	-.14	-.07	-.16

※ 左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数/女性顔への評定値との相関係数」を表す。

※ *は5%、**は1%水準で有意であったことを示す。

大学生男性：男性顔に対する明晰さ認知と中条件での距離化スキル行使との間に正の相関 ($r = .33, p < .01$) が、高条件での接近スキル行使との間に負の相関 ($r = -.24, p < .05$) が有意に見られた。また女性顔に対する信用認知と中条件 ($r = -.32, p < .01$)、低条件 ($r = -.28, p < .05$) の接近スキル行使との間に有意な負の相関が認められた (表3)。

大学生男性では、男性顔に対する評定において、明晰さ認知のみがスキル行使傾向と有意に相関していた。この認知の高さは接近、距離化スキル双方と関連していることが示され、対象の男性を明晰だと感じる人ほど比較的親しくない相手に対する回避や欺瞞を含む距離化スキル行使を多用し、親しい相手に対する親和や主張を含む接近スキルを使わない傾向にあることが明らかになった。一方女性顔に対する評定では、優しさ認知と接近スキル行使傾向のみが有意に相関していた。対象の女性を優しいと感じる人ほど、比較的親しくない相手条件における接近スキル行使が低いことを示す結果となった。

表3 大学生男性における各スキルと印象評定との相関

	距離高条件		距離中条件		距離低条件		接近高条件		接近中条件		接近低条件	
信用	.14	.01	.18	.03	-.02	-.15	-.12	-.28*	-.06	-.22	.03	-.07
明晰	.14	-.01	.33**	.08	.07	-.07	-.24*	-.08	-.15	-.07	-.08	-.02
狡猾	.07	-.02	-.10	-.05	-.11	-.02	-.16	.05	-.08	.13	-.08	.04
優しさ	.00	-.01	.19	-.06	.05	-.04	-.03	-.20	-.18	-.32**	-.11	-.28*
騙し	-.10	.03	-.13	-.06	-.12	-.11	-.10	-.04	.03	.08	-.01	.04
友好	.21	-.06	.21	.01	.11	-.10	.14	.01	.05	-.07	.07	-.15
見下し	.09	.06	-.03	-.03	-.16	-.11	-.21	.15	-.14	.09	-.12	-.03

※ 左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数/女性顔への評定値との相関係数」を表す。

※ *は5%, **は1%水準で有意であったことを示す。

大学生女性：男性顔に対する評定では、見下し認知と中条件での距離化スキル行使との間に有意な正の相関が認められた ($r = .27, p < .01$)。また、友好意図認知と中条件での接近スキルとの間には有意な負の相関が認められた ($r = -.20, p < .05$)。女性顔に対する評定では、明晰さ ($r = .24$)、狡猾さ ($r = .25$)、見下し ($r = .21$) 認知と低条件での距離化スキル行使との間に正の相関が有意であった (いずれも $p < .05$)。また見下し認知は、低条件での接近スキル行使とは負の相関が有意であった ($r = -.23, p < .05$) (表4)。

大学生女性の男性顔に対する評定では、比較的親しくない相手に対するスキル行使とのみ関連が見られた。そうした相手に対して、対象の男性から友好意図を読み取りやすい人ほど接近スキル行使が低い傾向にあり、見下し意図を感じやすい人ほど、距離化スキルを多用することが明らかになった。対して女性顔に対する評定では、親しくない相手に対するスキル行使のみ関連が見られ、対象の女性を明晰、狡猾、見下していると感じている人ほど距離化スキルを多く行使することが示された。また見下し意図の認知は接近スキル行使の少なさとも関連していた。

偏相関分析結果 単純相関分析において高校生男子、大学生男女群の明晰さ認知と距離化スキル、接近スキルとの相関が有意にみられたが、これらの相関分析結果には明晰さ認知に狡猾や見下し認知が含みこまれている

表4 大学生女性における各スキルと印象評定との相関

	距離高条件		距離中条件		距離低条件		接近高条件		接近中条件		接近低条件	
信用	-.03	.13	.05	.09	.09	.03	.00	.04	-.07	-.04	-.11	.01
明晰	-.04	.04	.04	.14	.12	.24*	.06	.17	-.11	-.02	-.15	.03
狡猾	.09	-.01	.07	.09	-.01	.25*	.05	.01	.08	-.02	.08	-.17
優しさ	-.06	.08	.02	.08	.09	-.01	.00	-.02	-.05	-.06	.08	.03
騙し	.02	.13	.09	.17	-.07	.16	.13	-.04	.07	-.05	.00	-.02
友好	.06	.18	.12	.07	.13	.00	-.03	-.05	-.20*	-.08	-.09	-.06
見下し	.17	-.09	.27**	.04	.08	.21*	.08	-.06	-.18	-.19	.04	-.23*

※ 左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数/女性顔への評定値との相関係数」を表す。

※ *は5%、**は1%水準で有意であったことを示す。

と解釈できる側面がある³ため、明晰さ認知とスキル行使傾向の純粋な関連を検討するために、すべての群で、狡猾、騙し、見下し評定得点を統制した偏相関係数を求めた。以下に各群での結果を示す。

高校生男子群では、単純相関分析で有意だった女性顔における明晰性認知と中条件の接近スキル ($r = .44, p = n.s.$), 距離化スキル ($r = .23, p = n.s.$) との正の相関が共に有意ではなくなり、新たに男性顔の明晰さ認知と高条件 ($r = .63$), 低条件 ($r = .50$) での接近スキル行使で有意な正の相関が認められた (共に $p < .01$, 表5)。

表5 高校生男子における明晰さ認知と各スキルとの偏相関分析結果

	距離高条件		距離中条件		距離低条件		接近高条件		接近中条件		接近低条件	
明晰	-.19	.15	.23	.37	.05	.32	.63**	.41	.44	.15	.50**	-.17

※ 制御変数：狡猾 & 騙し & 見下し

※ 左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数/女性顔への評定値との相関係数」を表す。

※ *は5%、**は1%水準で有意であったことを示す。

3 霊長類の知性が複雑な社会生活を営む中で洗練されたと考える立場 (Byrne, et al., 1988 藤田ら訳 2004など) では、重要な社会的練達の一つに互いに欺き合う能力を挙げている。こうした考えに従うならば、この調査における高い明晰性評定は対象人物における欺き能力の潜在的な高さを評定者が感じとっている可能性が考えられる。

高校生女子群では、単純相関分析で明晰さ認知と有意に相関しているスキルはなかったが、偏相関分析においても有意な関連性を示すものは見られなかった（表6）。

表6 高校生女子における明晰さ認知と各スキルとの偏相関分析結果

	距離高条件		距離中条件		距離低条件		接近高条件		接近中条件		接近低条件	
明晰	.09	-.08	-.01	-.09	-.01	-.11	-.17	.10	-.15	.12	-.01	.02

※ 制御変数：狡猾 & 騙し & 見下し

※ 左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数/女性顔への評定値との相関係数」を表す。

※ *は5%、**は1%水準で有意であったことを示す。

大学生男性群では、単純相関分析において有意であった男性顔に対する明晰さ認知と中条件での距離化スキル及び高条件での接近スキル行使は偏相関分析においても依然として有意であり、単純相関分析と同様に距離化スキル行使とは正の相関 ($r = .42$)、接近スキル行使とは負の相関 ($r = -.28$) が認められた (共に $p < .01$, 表7)。

表7 大学生男性における明晰さ認知と各スキルとの偏相関分析結果

	距離高条件		距離中条件		距離低条件		接近高条件		接近中条件		接近低条件	
明晰	.23	.00	.42**	.10	.10	-.08	-.28**	-.07	-.21	-.12	-.14	-.05

※ 制御変数：狡猾 & 騙し & 見下し

※ 左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数/女性顔への評定値との相関係数」を表す。

※ *は5%、**は1%水準で有意であったことを示す。

大学生女性群では、単純相関分析において有意であった女性顔に対する明晰さ認知と、低条件での距離化スキル行使との相関は偏相関分析においても有意に認められ、単純相関分析と同様に、正の相関が見られた ($r = .26$, $p < .01$, 表8)。

表8 大学生女性における明晰さ認知と各スキルとの偏相関分析結果

	距離高条件		距離中条件		距離低条件		接近高条件		接近中条件		接近低条件	
明晰	-.02	.05	.06	.16	.13	.26**	.05	.15	-.12	-.08	-.16	.03

※ 制御変数：狡猾 & 騙し & 見下し

※ 左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数／女性顔への評定値との相関係数」を表す。

※ *は5%、**は1%水準で有意であったことを示す。

また、大学生女子群における男性顔に対する友好意図認知、大学生男子群における女性顔に対する優しさ認知にも騙し意図認知が含みこまれている可能性があるため、これらについても騙し意図評定得点を統制した偏相関係数を求めた。その結果、大学生女性において、男性顔に対する騙し意図評定得点を統制して、友好意図認知と各スキルとの偏相関係数を求めたところ、単純相関分析で有意であった中条件の接近スキルとの相関は、有意でなくなった ($r = -.18, p = n.s$)。大学生男子において、女性顔に対する騙し意図評定得点を統制して、優しさ認知と各スキルとの偏相関係数を求めたところ、単純相関で有意であった中条件、低条件の接近スキルとの相関は、偏相関分析においても依然として有意だった (中条件: $r = -.31, p < .01$, 低条件: $r = -.28, p < .05$)。

考察

本研究の目的は、対人的接近、距離化スキルの双方に関して、その行使を支える基盤として想定される社会的情報処理傾向を探るため、両スキル行使傾向と表情刺激に対する印象評定傾向との関連を探索的に検討することであった。

結果から、各スキルは共に、その行使と相関する印象評定パターンがあることが示された。まず対人的接近スキルと正の方向で関連があったのは、信用、明晰さ、優しさ、友好意図認知などであった。初めに予測した通り、他者の顔からポジティブな属性や意図を読み取るほど接近スキル行使が多くなることが示唆されたといえる。また反対に、騙し意図や見下しなどと

いったネガティブな情報を感じ取る傾向と接近スキル行使傾向とは負の相関が見られた。自己にとって良からぬ結果を導く危険性のある手がかりを感じるほど、関係を維持させるスキルを使わなくなるという現象は、次に述べる距離化スキル行使がネガティブな印象評定と関連していることと整合する結果といえるだろう。

対人的距離化スキル行使傾向と印象評定との関連は、距離化スキルとリスク回避の関連が示唆される結果が多く得られた。高校生男子群を除くすべての群で、狡猾、騙し、見下しなどといった、自己にとってネガティブな結果が想定される印象評定と、親密性が比較的高くない条件における距離化スキルの行使得点が関連していた。これらは、これまでの研究（石井・新堂，2011）で示されてきた距離化スキルのリスク回避機能を支持する結果と考えられる。青年らは対人状況において、自身の資源を搾取しかねない兆候を相手に見出すと、関係を収束させる距離化スキルを行使してその関係から脱却し、結果として危険な状況を避けることができるのかもしれない。高校生男子ではこうした傾向が見られなかった。これは男子においては青年期中期と後期で発達の差異があるとも解釈できるが、後述するように今回の調査では高校生男子群の人数を十分に集めることができなかったため、今後サンプルサイズを確保して改めて検討することが要されるだろう。また、この群でネガティブな印象評定は距離化スキルとは関連が見られなかったが、見下し認知と接近スキル行使との負の相関が見られたことから、高校生の男子においても、自らを脅かす可能性のある相手に対しては関係を維持する行動を抑制することが推測される。なお、距離化スキルと印象評定との関係について、今回の結果では、各印象評定傾向は親密性が中、低条件でのみスキル行使傾向との関連が見られたが、家族や恋人などの親密な相手に対して距離化スキルを行使する際にその根底でどのような情報処理過程が働いているかは、今後明らかにしていかなければならないだろう。

しかし一方で、単純相関分析では距離化スキルのリスク回避機能を反映

した評定とは一見解釈しづらい結果も見受けられた。具体的には高校生男子群、大学生男女群の明晰さ評定、大学生男性群の優しさ評定、大学生女性群の友好意図評定が各々距離化スキル行使と正の方向で関連すると示されたことである。それらの内、高校生男子群の明晰さ認知、大学生女性群の友好意図認知と距離化スキルとの関連に関しては、その後の偏相関分析結果から、他の印象認知が混在していた可能性が明らかとなった。高校生男子群においては、明晰評定に搾取、騙し意図、見下し評定が交絡していた可能性が示唆された。これら三つの評定値を統制した偏相関係数をみると、明晰さ認知は距離化スキルとの関連が消え、新たに接近スキルと関連することが分かった。したがって、高校生男子にとっては、明晰さを認知する際、その背後に潜む、相手が自分に対して抱くネガティブな意図を含めて感じ取ってしまうために回避行動を促進することになったのであり、明晰さそれ自体は接近を動機づける手がかりなのだろう。同様に、大学生女性群での友好意図と距離化スキルの関連は、騙し意図評定得点を統制した偏相関分析においては有意にならなかった。この結果は青年期後期段階の女性が男性顔に対して行った評定条件でのみ見られたものであるため、女性にとって性的被害リスク認知と関連するものかもしれない。Haselton & Buss (2000) は女性が男性の性的意図を過剰知覚しやすい傾向にあるとし、その説明として、過剰に知覚するエラーの方が過小に知覚する（性的意図を見過ごす）エラーよりもコストが少ないためと解釈している。女性にとって親しくない異性は性的関心に関する情報が少なく、大抵の場合自身よりも体格が大きいため、安易に近づくコストが大きいと考えられる。そのため、相手の友好意図の中に自分への（性的）接近欲求が巧妙に隠されている危険性を敏感に感知した際、それが距離化スキル行使につながるのかもしれない。以上二つの偏相関分析結果は、単純にはポジティブだと解釈されうるような属性や意図の評定の際に、その背後に潜むリスクを感じることによって距離化スキルを行使している可能性を示唆するものであり、これもリスク回避の一つととらえることができるだろう。

しかし、大学生男女群の明晰さ認知と距離化スキルとの関連においては、こうした結果は得られず、搾取、騙し意図、見下し評定を統制しても尚、依然として明晰さ評定の高さは距離化スキル行使頻度と正の方向で関連することが明らかになった。つまり青年期後期段階では、そこに潜む危険性を排除しても、明晰さ認知は距離化スキル行使を動機づける可能性が示された。発達段階の違いによって、明晰さ認知が如何なる対人行動を動機づけるかの方向性が異なることが明らかになったのである。これは、今回印象評定対象として使用した写真の人物と、評定者との年齢的関わりから解釈することができるかもしれない。写真の人物は20代後半～30代前半の年代であるため、高校生群にとっては「完全に大人」、大学生群にとっては「自分よりも少し大人」であろう。ここで青年期中期、後期段階の大人との関わりを考えると、二つの段階ではその様相が異なることがうかがえる。青年期は親世代からの独立が大きな特徴として挙げられるが、落合・佐藤(1996)は、青年期内において、親子関係の発達の変化が生じていることを示している。彼らは、青年期前期である中学生時点においては親が子どもを保護する関係性が特徴的であるが、後期である大学生の時点頃に親子の関係が精神的対等性を帯びる形で変化するとしている。その過渡期である高校生では中学生ほどではないものの年長者のケアが比較的受け入れやすい段階と考えることができよう。そうした特徴を持つ青年期中期段階では、ネガティブな意図を含まない明晰さを大人が有していると感じたときには、相手に頼ってその恩恵に預かりたいと動機づけられるかもしれない。対して青年期後期である大学生は先に述べた大人との精神的対等性を意識しているのが特徴といえる。したがって、この段階においては、知性の高い大人が自分の被保護可能性を高めてくれると感じるとは考えにくい。むしろ大学生にとっての他者の賢さ認知は、相手による直接的搾取可能性以外のリスク要素が含まれているといえるのかもしれない。青年期後期における他者の賢さに関わるリスクは、たとえ相手が自分の資源を直接搾取しようとしていなくても、競争場面で自分を出し抜いてしまい、自信やアイ

デンティティを脅かす可能性が含まれるのではないだろうか。大学生を対象とした石井（2011）では、比較的親密性が低い相手に対して状況を把握したうえで距離化スキルを行使すると本人の自尊感情が下がらないという結果が得られている。これを今回の結果と併せて考えると、相手の（自分よりも高い）知性を認知することが距離化スキル行使に繋がり、それが十分に状況を理解した上で行われた場合には自分の自尊心を下げない結果になるのかもしれない。今後の実証検討が不可欠ではあるが、こうした過程が実際に成立しうるとすれば、これも複雑な形のリスク回避に分類されるだろう。

以上の結果は、様相が質的には各々異なるものの、いずれも距離化スキルのリスク回避機能を示すものと考察できる。しかし大学生男性群において、女性顔の優しさ認知と距離化スキルの正の相関が単純相関分析でも騙し意図評定を統制した偏相関分析でも一貫して見られたことは、リスク回避の面からの考察が難しい。この結果については解釈が容易ではないが、距離化スキルにリスク回避以外の機能が存在している可能性が考えられる。石井（2007）が作成した距離化スキルの測定項目には、単なる回避や欺瞞だけではなく、相手の話に合せたり、迎合したりする内容の項目も含まれている。尺度作成時点では距離化スキルに関して、その場の関係を収束させる目的で行使されると想定していたが、実際にはこのスキルが相手への配慮を目的として使われる場合もあるのではないか。今回の結果が、大学生男性の女性顔に対する評定のみで見られたことを考えると、力としては自分の方が強くなっていると推測できる少し大人の異性に対して優しさというポジティブな属性を感じることができる人ほど、配慮という形で距離化スキルを多用する傾向にあるのかもしれない。ただしこの解釈に関しては、妥当性が不明なため、距離化スキルにリスク回避以外のどのような機能が備わっているかも含め、さらなる検討が必要になるだろう。

最後に本研究の限界と今後の課題を述べておく。まず、今回の調査における方法論的問題が考えられる。今回顔刺激として使用した対象は男女各

一名と非常に少数であった。また、今回の調査では、複数の表情に対して、印象評定を求める形式で社会的認知傾向を測定したが、写真の人物がそもそも本当にネガティブやポジティブな意図を有しているのかについては正解が存在しない。実際に諸研究において、私たちは欺瞞認知に関して poor lie detector であることが知られており (Zuckerman, et al., 1981 ; Akehurst et al., 2004), 相手の騙し意図読み取りが正解する確率は低いといえる。したがって、例えば搾取や騙しの意図を高く読み取る個人がいた場合、その人がリスクを正しく読み取ることができているのか、本来なら危険性のないものに対して不適切にリスクを見積もっているのかは今回の結果からは不明なままである。

さらに、調査協力者数にも限界があり、高校生男子のサンプルサイズが十分ではなかった。正確な結果を得るためにはこれらを解決する必要があった。

しかしこうした課題は残っているものの、本研究において、スキル行使と他者刺激への認知傾向とに一定の関連が見出せたことは意義があったといえよう。今回は静止画像による表情刺激への印象評定に焦点を当てて検討を行ったが、今後、刺激や社会的情報処理傾向の範囲を広げて考察することで社会的スキルの行使成立までの道筋を実証的に解明できるようになるだろう。

文献

Akehurst, L., Bull, R., Vrij, A., & Köhnken, G. (2004). The effects of training professional groups and lay persons to use criteria - based content analysis to detect deception. *Applied cognitive psychology*, **18**, 877-891.

相川充 (2009). 新版人づきあいの技術 社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学 サイエンス社

相川充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993). 孤独感の高い大学生の対

人行動に関する研究 —孤独感と社会的スキルとの関係— 社会心理学研究, 8, 44-55

Argyle, M. (1967). *The psychology of interpersonal behavior*. Penguin books. (M. アージル (著) 辻正三・中村陽吉 (訳) 1972 対人行動の心理 誠信書房)

Argyle, M. & Kendon, A. (1967) *The Experimental Analysis of Social Performance in Berkowitz, L. (Eds) advances in Experimental Social Psychology, 3, 55-98. Academic Press.*

Byrne, R. & Whiten A. (1988). *Machiavellian Intelligence*. Oxford University Press. (バーン・ホワイトウン 藤田和生・山下博志・友永雅己 (監訳) (2004). マキャベリの知性と心の理論の進化論：ヒトはなぜ賢くなったか ナカニシヤ出版)

大坊郁夫 (2008). 社会的スキルの階層的概念 対人社会心理学研究 8, 1-6.

DeRosier, M. E., & Marcus, S. R. (2005). Building friendships and combating bullying: Effectiveness of SS GRIN at one-year follow-up. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, 34, 140-150.*

Hargie, O. (1986). Communication as skilled behavior. In Hargie, O. (Eds) *A Handbook of Communication skills*. Croom Helm.

Hargie, O. (Ed.) . (2006). *The handbook of communication skills*. (3rd ed) Psychology Press.

Haselton, M. G., & Buss, D. M. (2000). Error management theory: a new perspective on biases in cross-sex mind reading. *Journal of personality and social psychology, 78, 81-91.*

石井佑可子 (2006). 社会的スキル研究の現況と課題 —「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて— 京都大学大学院教育学研究科紀要

52, 347-359.

石井佑可子 (2007) . “メタ・ソーシャルスキル” 測定尺度作成の試み 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 286-298.

石井佑可子 (2011). 対人的接近-距離化スキルの機能: 相手との関係性別分析. 東京大学大学院教育学研究科紀要**50**, 111-118.

石井佑可子 (2014). 青年期における社会的スキルの発達の変遷: メタ認知・対人的距離化スキルの機能から. 藤女子大学文学部紀要, **51**, 75-96.

石井佑可子・新堂研一 (2011). 在宅非行少年における社会的スキルの様相--メタ認知, 対人的距離化スキルの観点から. 臨床心理学, **11**, 65-76.

落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11—22

Trower,P. (1995) *Adult social skills:State of the art and future directions*. In O'Donohue,W. & Krasner,L (Ed) *Handbook of psychological skills traning: Clinical techniques and applications* pp54-80.

渡辺弥生・星雄一郎. (2009). 中学生対象のソーシャルスキルトレーニングにおけるセルフマネジメント方略の般化促進効果. 法政大学文学部紀要**59**, 35-49.

Zuckerman, M., DePaulo, B. M., & Rosenthal, R. (1981) . Verbal and nonverbal communication of deception. *Advances in experimental social psychology*, **14**, 1-59.